

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残る2XXX年の東京。A.C.I.D. (対天災国際防衛省) に所属する十七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。時は六月某日、天魔の討伐に向かった天海達は、そこで突発的に発生した局地的集中豪雨(ゲリラ豪雨)に遭遇する。「親玉」と呼ばれる強大な天魔を相手に善戦する天海だったが、後輩で新人の日暮風沙へ向けられた攻撃を庇い、瀕死の重症を負ってしまう。風沙は出撃前に補佐官の神宮寺陸斗から「奥の手」と言われ渡されたアドレスの存在を思い出し、「縷の望みをかけ通話を繋げる。すると、通話越しに少女の「晴域形成」の声が聞こえ――

【主な登場人物】

天海快晴……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織

《A.C.I.D.》の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》により左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照……快晴の妹。《第二次世界大天災》で被災した後遺症が遺っており、基本的に《A.C.I.D.》東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。

神宮寺陸斗……天海快晴ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。東京支部全体の副隊長でもある。天海兄妹とは古くからの付き合い。

日暮風沙……東京支部の新人調停士兼メカニック。機械いじりとかわいいものが好き。快晴とは研修生時代に師弟関係にあったことがきっかけで、一方的に恋心を抱いている。

水無瀬亞真理……東京支部の調停士。青みがかったグレーの長髪に、青いアイシャドウの映える端正な顔立ちの美人。守りに特化した傘術を使う。

伊勢島狭弥刀……東京支部の調停士。ニメートル超え

の巨漢で、傘も大ぶりのものを扱う。ラムザのお目付け役的存在。

一条ラムザ八久留……東京支部の調停士。小柄な少年

で、目元まで隠すような黒い鉄のバケツを被っている。女の子好きで求婚癖がある。

「晴域、形成」

そう、聖女が賛美歌のフレーズを歌うような慈愛に満ちた声が、スピーカー越しに風沙の鼓膜を震わせた。それは決して大きな声量ではなかったものの、まるで脳裏を直接振盪させるかのように、戦場にいた誰の耳にもはつきりと聞こえた。

「……！！」

直後、風沙は息を呑み、上空を見上げる。

晴域を挟んだはるか上方の空は、鼠色の雲から刺すような雨が降り続いていたはずだった。それが、何者かが空から雲を掻き分けているかのように、さながらモーセが海を割ったように、厚い雲が裂け始めたのだ。隙間から除き出す空は、まさに海と見紛うほど青々としていた。

「ギヤアアアッ……！！」

すると、雲域を占領していた有象無象の天魔たちは、断末魔を上げながら次々と蒸発していく。その様子を目の当たりにして、天海へと腕を振り上げていた親玉の怪物も思わず動きを止める。

「ナ、ナンダ！？ 何が起コッテイル……！！」

「……神宮寺」
天海は怪物ともまた違う焦りと、怒りを宿したような目で Tell-Tel を睨む。

『今のは私ではないです。まあ、私もこの状況だったら、遅かれ早かれ同じことをしていたと思いますが』

神宮寺はいたって冷静にそう伝え、ナビゲーションを風沙へと切り替える。『日暮さん、ナイス判断です。親玉もだいたい弱っているようですし、今なら日暮さんの手でも倒せると思います』

「あ、あたしですか！？」

武器である傘をすっかりしまい込んでいた風沙は、突然の指名にびくりと肩を震わせる。肉体的にたいした外傷はない風沙だったが、精神的な疲労でへとへとになっていた。

『はい、正確には現時点での適任が貴方しかいないと言ったほうが正しいですが。太陽の光が直撃しているので遠からず消滅はするでしょうが、満身創痍の天海さんにとどめを刺すくらいは猶予は残っているはずですよ』

「——っ！！」

そう聞いてはじっとしているわけにはいかない。風沙は慌てて振り返り、膨張した風船のような怪物の頭部を見据える。奥の手である通話を邪魔されないよう必死に距離を取っていたが、幸いそこまで離れているわけではなかった。動く足の一本を狙う精密射撃は難しそうだが、頭部を撃ち抜くくらいならよほどのが大きく動かなければ十分可能だろう。

「クソ、忌々シイ太陽メ……！ エエイ、調停士！ お前ダケでモ道連レにシテヤル！！」

自らの死期を悟ったのか、怪物は双腕を振り上げ、再び天海へ襲いかかるうとする。

「っ、させるか！」

風沙は傘を構え、天魔の頭部へ狙いを定める。放たれた光弾はやや右に逸れるも、顔の中心近くに命中し、怪物は呻いて大きく仰け反る……が、

「——！！」

天魔は全身を不安定に揺らがせながらも、最期の執念とでも言うべきか、その二本の腕だけは勢いを緩めることなく天海の頭上へと迫る。風沙は再度光弾をチャージしようとするが、先の命中するまでの速度を見ると、今からでは間に合いそうになかった。

『っ、天海さん！ 避けて！』

神宮寺が指示を飛ばすも、天海はその場から動く気配がない。そもそも、とっさに反応して動けるだけの体力

が残っているかも怪しかった。

「——カイ先輩！！」

声を裏返らせながら、必死に叫ぶ風沙。元はといえば自分が彼の危機を招いたようなものであり、自身の無力さと憎悪にも似た罪悪感を持たずにはいられなかった。

「ケケケ……終ワリだ、死ネエツ！！」

日光に当てられ茶色く色褪せつつも、勝ち誇ったようにニタリと笑う天魔。天海はそんな目の前の怪物を、汚物でも見るかのような目で睨みつけていた。

「……照、を……」

そして怪物の双腕が地に届く、ほんの数コンマ直前に、天海は振り絞った体力で地を蹴った。

「……照を、これ以上……苦しませるなッ！！」

天魔の手腕をかくぐり、懐へと一気に距離を詰めた天海。その速さもあるが、何より仕留め損なうはずのない獲物が動いたことに意表を突かれ、天魔が無防備な顔を彼の眼前に晒す。

「ギッ……！！？」

瞬間、天魔は手負いの人間とは思えないほどの殺気を肌で感じ、思わず身を竦ませた。それまで数多の人間を間接的にも直接的にも軽々と葬ってきた怪物にとって、人間とは単なる蹂躪の対象であり、恐れるものではないはずだった。それが怪物の覚えた、最初で最後の恐怖という感情であった。

「うおおおおっ!!!」

雄叫びのような声を上げ、天海は傘を振り上げた。その一撃は肉を裁ち骨を割き、内臓すら潰してしまふほどであったが、傘のほうも骨がミシミシと悲鳴を上げていた。しかし主の執念が伝染したのか、切っ先が怪物から離れるまではその身を留め続けた。

「グ……ゴガ……ッ」

まとまった断末魔を上げるような理解も、体の破損具合も追いつかないまま、怪物の目は虚ろになる。日の光が残された肉体を照らし、怪物だった肉塊は融けるように無くなっていく。

「……はあ、はあ……ッ」

変な方向から無理な力を加えたせいか、傘は骨組みがねじ曲がってしまっており、既に杖の役割は果たしていなかった。日の光をスポットライトのように浴びながら、天海はふっと意識を手放し、その場に倒れ込む。

と、最後の攻防に干渉することもできず呆気に取られていた風沙が、はっと我に返って駆け寄る。

「カイ先輩!? しっかりしてください、カイ先輩……!」

目に涙を滲ませて天海の肩を揺する彼女を、神宮寺が穏やかに宥める。

『大丈夫です、息はあります。救護班へは連絡したので、じきに来てくれるでしょう……同行を頼めますね、日暮

さん』

「は、はい」

内心ドキリとしたものの、二つ返事で了承する風沙。戦闘では先輩調停士たちには及ばずとも、せめてその外のことくらいでは彼らに貢献したかった。

と、そこへ彼女の Tell-Tel が、着信のバイブを鳴らす。通話を開始すると、どうやら複数人での通話らしく相手は二窓に分かれていた。

『あつ、凧ちゃん! 無事だったんだね! よかったー』

開口一番まくし立てるような声が、画面の右側——巨

漢の伊勢島狭弥刀と、彼の肩に担がれたバケツを被った

少年、一条ラムザ八久留いちじゆうのほうから聞こえてきた。変声

期も迎えていないようなあどけない少年の声は、間違いなくラムザのものだろう。

『ったく、天海も風沙ちゃんも気付いたらいなくなつて、心配したんだからね』

そう溜め息まじりに言いつつも表情を緩ませるのは、青みがかつたグレーの長髪とブルーのアイシャドウが特徴的な先輩調停士、水無瀬亞真理。当作戦中に天海や風沙と行動を共にしていたが、途中ではぐれてしまつてい

たのだ。

「す、すみません、勝手な行動をしてしまつて」

『ま、無事ならいいんじゃないか。水無瀬とはぐれたのも、天海を追いかけるのに必死だったからだろ』

もともと細い目をさらに細めて、伊勢島がフォローを入れる。『……というか、その天海はどこに行ったんだ。発信はしてるんだが、一向に出ないな』

ようやく天海の話が出て、風沙は言いづらそうに顔を俯けて話し出す。

「え……つと、その、カ……天海先輩は、私を庇つて……」

揃つて口を開け真顔になる三人に、風沙は慌てて付け加えた。「あ、いえ、息はあるみたいです。救護班もすぐ来てくれるらしいので……」

それを聞いて、三人は通話越しにも聞こえるほどのため息をつき、口々に「よかつた」と呟いた。

『考えてみたら、確かに風沙ちゃんぐらいいだと『天海ルール』に抵触しちゃうもんね』

ラムザが放つた言葉の意味がわからず、反射的に聞き返す風沙。「天海……ルール？」

『ああ……まあ、名前はこいつが呼んでるだけなんだが……どうも、あいつのトラウマみたいなもんらしいな。部外者の俺らが勝手に話すのも何だから、気になるんだつたら聞いてみるといい』

『ま、早い話、風沙ちゃんが責任感じる必要はないよつてこと。仮に天海が死んでたとして、ボクらが風沙ちゃんを責めることはないよ』

どうも先輩間での彼の扱いが雑なようにも感じる風沙だったが、亞真理をはじめとした調停士の先輩らが、なんとか自分を励ましたり慰めたりしようとしていることは伝わり、それを自覚した途端に何か彼女の胸の奥からこみ上げてきた。

「……つ、ごめんなさい……ありがとう、ごさいます」
『えつ、ボク今酷いこと言つた？ ごめんごめん、泣かないでー』

『あーつ、アマリが風ちゃんのこと泣かしたー！ いーけないんだいけないんだー！』

『小学生かよ前は……』

自分でも何の涙なのかよく分からなかったが、ともかく身体が何らかの重圧から解放され、幾重にも重なる心情が一斉に込み上げてくるような感覚だった。一度決壊したものは抑えようとしても止めどなく溢れ出し、風沙は心配の音を一層強める先輩たちに、ただただしゃくり上げながら謝ることしかできなかった。

すっかり晴れ渡つた空を、一羽の鳥が間の抜けた鳴き声を上げながら横切つていった。

* * *

天海はすぐ集中治療室へ運ばれたが、命に別状はないものの、意識が回復するまでにはしばらく掛かりそうだということらしい。風沙たち他の調停士は目立った怪我はなかったものの、一応ということで医務室に立ち寄り処置を受けていた。

「……つはー！ やっぱり出撃後の風呂と瓶ミルクがいちばん沁みるねー」

「医務室をスーパ―銭湯のロビーみたいに扱わないでくれる？」

軽い擦り傷を消毒する程度で処置が終わったラムザと伊勢島、亞真理の三人は、各々の居住ルームに備え付けられた浴室でシャワーを浴びてきたらしい。自販機で買ったらしい瓶のミルクをぐびぐびとおおるラムザを、看護師の白石しろいしが冷たい目で見つめる。

「河井も元氣そうで安心した。本業に支障はなさそうか」

伊勢島が声をかけた先には、ベッドでお裾分けの瓶ミルクを飲んで、オレンジ色の髪をボブカットにした人目を引く少女の姿があった。

「うん、大事とって休んでただけだからねえ。大丈夫そうだよお」

河井、と呼ばれた少女はふわふわした甘い声で、伊勢島に微笑みかける。たったそれだけの仕草だが、なぜか

人とは違うキラキラしたオーラが溢れ出ているようだった。

と、そこへ遠慮がちにドアの引かれる音がして、部屋に着替えた風沙が入室してくる。

「お、お帰り風沙ちゃん。傷口沁みなかった？」

水無瀬がそう問いかけながら、瓶ミルクを手渡す。風沙は少々困惑しつつも、お礼を言っ瓶を受け取る。

「……カイせんば……天海先輩、大丈夫なんでしょうか」
「絶対に大丈夫とは言えないが、まあ今までも何度かあったことだからな。そこまで悲観的になる必要はないと思うぞ」

伊勢島が気を遣ってくれたとは分かりつつ、風沙はほんの少し、胸のつかえが取れたような気がした。

「あ、この子が皆の言ってた、新人の風沙ちゃんって子？」
風沙は側方から掛かった聞き覚えのない声に振り返る。そしてベッドから身を起こしている少女に目を留めると、はっ、と大きく息を呑んだ。

「え、え……っ」

ぽかんと口を開けたまま固まる風沙。少女は不思議そうに首を傾げ、口を開こうとしたが、それより前に風沙がベッドに突撃する勢いで駆け寄る。

「あ、あの……もしかして、ミイたん……河井かわいミイナさんですか！？」

「……ミイ、たん……？」

少女二人を除く三人は訝しげに互いに目を合わせるが、その名で呼ばれた当の少女は嬉しそうにニコリと笑うと、風沙の手を掴んで言った。

「ここでその名前を知っている子に会えるなんて、嬉しいなあ。よろしくねえ、風沙ちゃん」

名前を呼ばれた風沙はみるみる頬を紅潮させ、見ている側にも興奮が伝わるほどに顔を綻ばせていた。

「は、はい……っ！こちらこそ……！」

風沙はやたら高くなった声で返事をし、それから力を使い果たしたように床へ座り込む。その様子を見ていた先輩ら三人は、そこまでの昂揚が分かりかねるといいうように彼女へ尋ねた。

「……河井ミイナって、そんな有名人とかだったの？」

水無瀬の問いに、風沙は愚問だと言わんばかりに立ち上がり、険しい顔で詰め寄る。

「な、何言ってるんですか水無瀬先輩！河井ミイナ、通称ミイたんと言えば、あの超有名ティーン雑誌『Candle』専属、読者人気ナンバーワン超有名激カワモデルなんですよっ」

早口でまくし立てる風沙に押され、水無瀬は引き気味に頷く。「へ、へえ、そうなんだ」

「日暮、こいつは去年まで西欧支部にいた人間だから、日本の文化的なことには疎いんだ。許してやってくれ」

「えっ、そうなんですか」

見かねた伊勢島が助け船を出し、水無瀬は解放される。「……長いこと日本にいたオイラも、今まで知らなかったけど……」

「あ？」

「あー、ほら、こいつも調停士生活が長いから……」

本当は俺だって知らなかったが、と言いたいところをぐっと堪え、伊勢島は仲間へのフォローに徹する。天海への態度もそうだが、風沙は好きなものことになること見境がなくなる節があるようだった。

「でも、どうしてミイたんがこんな所に……まさか調停士だって言うわけじゃないだろうし……」

首を捻る風沙に、ミイナ本人があっさりと答える。

「ああ、実は私、調停士なんですよ。モデルと兼業で」

「へえ、モデルと兼業で……って、え、ええっ!？」

大きく上半身を反らし、素早く後退りしながら驚愕する風沙。「そんなに驚くことかなあ」とミイナは苦笑いする。

「だ、だって調停士って、怪我しやすしい死ぬかもしれないし、めっちゃめっちゃ危なくないですか!？お給料も危険の割にはそんなに出るわけじゃないし、第一ミイたんが副業する必要がよくわからないし……」

身振り手振りを交えながら畳み掛ける風沙に対し、ミイナはあからさまに困ったような「あー」という声を上

げる。

「なんていうのかなあ……本業はモデルなんだけど、本業のために、調停士はやらなきゃいけないことなんだ」

「やらなきゃ……いけない……？」

言葉を濁すミイナに質問を重ねようとした凧沙だったが、

「その位にしといてやれ」

と、後方から伊勢島がやんわりと、しかしはつきり忠告のニュアンスが籠もった声で彼女を止めた。

「好奇心旺盛なのは良い事だが、誰にだって聞かれないことはあるんだ。変に嫌われたくないなら、引き際は弁えたほうがいい」

伊勢島の真剣味のある声に、凧沙はハッと我に返り、追求を諦めてしゅんと身を縮める。

「す、すみません……そうですよ、ミイナさんにも事情がありますもんね……」

「……ま、この日本で進んで兵士になろうとする奴なんて、理由アリじゃないほうが少ないからな」

伊勢島はさっぱりした口調で、どこか悟ったように告げる。

「そういえば、ボクも伊勢島やラムザの内情、よく分かってないしね。なんとなく、知る必要もないかなと思ってるし」

「オイラは凧ちゃんの話なら聞きたいけどな。あ、話

して大丈夫ならでいいけどね」

亞真理とラムザも距離感は違えど、不必要な詮索はしない、というスタンスは伊勢島と同じようだった。

「誰だって、詮索されたくないことの一つや二つあるもんだ。自分が踏み込まれたくないから、他人にも踏み込まないんだらうよ」

言葉にこそしなかったが、凧沙に向けられた糸のような細い視線は、「お前だってそうなんだろ」と言っているように、彼女には感じられた。

「……わたし、は」

凧沙は誰に向かってでもなく呟き、ただ自らの掌に目を落とした。瓶に映った自分の顔から、少女は反射的に目を逸した。

*

*

*

結局、その日の夜になっても天海の意識は戻らなかった。施せる限りの治療は既に成したとのことで、彼は医務室のベッドに戻されていた。しかし凧沙は自責の念に駆られてか、深夜に目が覚めてしまい、忍び込むように医務室を訪れていた。

「……先輩、っ」

暗闇の中で目を凝らすと、呼吸器や透明な管の輪郭がぼやっと見えてきて、凧沙は自分の心臓が痛むような錯

覚を覚えた。自分を責めたところで今更どうにもならないことは理解していても、自分のせいで、という後悔はどこか抜けきらずにいた。

「……あれ、そこに居るのは……もしかして、風沙さん？」
すると突然、天海のベッドの奥から彼女を呼ぶ声が出て、風沙は一瞬びくつと肩を震わせる。風沙はその声が誰のものなのかすぐには分からなかった。

「……え、と」
「あつ、照です。こんばんは」

「こ、こんばんは」

呑気に挨拶をするシチュエーションでもなかったのだが、風沙はとっさに返事をしてしまう。

「お兄ちゃんのお見舞いに来てくれたんですよね、多分。ありがとうございます」

「べ、別に礼を言われるようなことでもないでしょ。……元はと言えば、私のせいみたいなものだし」

尻すぼみになった発言を照が聞き返すより先に、風沙は誤魔化すように続けざまに照へ迫った。

「ていうか、なんであんた、すぐに私だつて分かったの？
こんな暗い中じゃ顔も見えてないでしょ？」

照は少し間を置いてから、「ああ」と返す。

「こんな夜中に心配して来てくれるなんて、たぶん風沙さんだろうな、って思ったんです。あ、もちろん他の方が冷たいとか、そういうんじゃないかと……他の皆は、あ

る程度、こういうのには慣れっこだから」

「慣れっこ……って」

人が死にかけているというのに、それは冷たいんじゃないか——そう言いかけた矢先、風沙の脳裏には昼間の、先輩たちの発言が過ぎった。

「……そういうえば、これまでも何度か、こういうことがあった、って……」

はつとする風沙の表情を察したかのように、照が苦笑交じりに語り出す。

「お兄ちゃん、昔からそういうところがあつて。目の前で人が傷付くのが耐えられなくて、自分の命なんてどうでも良くなつちゃう、っていうか」

「……！」

「……多分お兄ちゃんは、十年前の天災で……お父さんやお母さんが死んじゃったことや、私がこんな身体になつちやつたことを——助けられなかったことを、今でも悔やんでるんだと思う。それがお兄ちゃんの中で、トラウマになつてるんじゃないか……って」

その言葉を聞いたとき、風沙の頭には二つの場景がフラッシュバックした。一つは当然、半日前の激闘の記憶。もう一つは——

* * *

それは今から五年ほど前、風沙がまだ十一歳の小学生だった頃のこと。彼女の住んでいた地区に巨大災雲が発生し、一帯は避難区域となった。シングルマザーである風沙の母は仕事に出ており、避難指示が出た当時、風沙は一人で避難場所へと向かっていた。

だが、不幸にも災雲の発生場所は、風沙の家からほど近い場所であった。加えて身も吹き飛んでしまいそうな強風と、視界を遮る横殴りの雨により、思うように足が進まなかった。

だが、無心で足を進めているうち、不意に肌身に感じていた抵抗が無くなり、風沙は訝かしんで顔を上げた。

視線の上に広がっていたのは、気味が悪いほどの青々とした空。先程までの重く厚い、圧迫されるような雲は、見渡してもどこにもなかった。

通常であれば、天魔の姿は一般市民には視認できない。しかし、たまたま調停士が張った晴域の中に入ってしまった場合は例外である。幼い風沙は一人、だだっ広い青空の結界の中に閉じ込められてしまったのだ。

「……だ、どうしよう……だ、誰か、誰かいませんか……」

状況の異様さに、風沙は底知れぬ不安を覚える。視界が明瞭になったことで、雨風に蹂躪され廃墟のようになった街の姿がありありと見え、いたずらに恐怖を煽る。

一般の人間が「晴域」を外から認識することはできず、

また「晴域」の中から外への干渉はできない。彼女が外へ出るには、ドームの端を自力で見つけなければならなかった。

「すみません、誰か……っ!?」

「オウオウ、コンナ所ニ人間ノ小娘ガ居ルゼエ」

突如として頭上から響いた声に、風沙は身を震わせた。辺りの空間ごと振動させるような、まさに身の毛もよだつような声。恐る恐る視線を上げ、さらに少女の顔が引き吊る。

「ひっ……!?」

そこには長い胴体と鉤爪の伸びたがっしりとした手足、蝙蝠のような翼を大きく広げた、蜥蜴——いや、竜のような生物が、長い舌を覗かせながら彼女を見下ろしていた。

「調停士……ジャあ無さソウダナ。ケツヘツへ、ヒトを護ル為ノ晴域ガ、無力な生命ヲ犠牲ニスル檻ト為ル……良イ気味ダぜ、全ク！」

竜の怪物は腹を抱えながら、首を反らせて高笑いする。それから右手を振り上げ、三本の指を順番に折っては戻す動作を繰り返す。

「可哀想ニなア。馬鹿ナ調停士ノ所為デ、罪ノ無い小娘ノ生命ガ犠牲ト為ルノダカラ……ケツへへ、彼奴らノ悔やム顔ガ楽シミダナ……ッ！」

その瞬間、幼い彼女にも、自分が何をされるのかは察

しがついた。今にもその鋭く尖った爪に衣服が引き裂かれ、柔らかな肉体はいとも容易く千切れ、惨たらしく鮮血と臓器を撒き散らすのだろう——そんな余りに現実離れした、十一歳の少女には残酷すぎる光景が脳裏に浮かび、風沙は思わず目をぎゅつと瞑った。

——しかし、何時まで経っても痛みは訪れない。何の感覚もないため、もしかして既に死んでいるのではないかと、風沙は恐る恐る目を開け、自身の体へと視線を落とした。

目を閉じる前と何も変わっていない、ただ水と泥に汚れた衣服とレインコートが目に入る。何か視界が暗いように感じた風沙は、自分を覆うように影が落ちていることに気付き、はっと顔を上げた。

「……大丈夫か？」

視線の先にあったのは、風沙より少し年上くらいの少年の顔だった。灰色のレインコートのフードを目深に被り、左目に眼帯を付けた少年が、心配そうに風沙の瞳を見つめていた。

「えっ、あ……は、い」

認識がはっきりしてくるにつれ、次第に身体感覚が現実へと戻っていく。そこでようやく、風沙は自身の体が、文字通りの地に足のついていない状態であることに気が付いた。縮こまった風沙を、少年が抱きかかえてい

たのである。

「怖い思いをさせて悪かった。もう大丈夫だ」

「え……っ」

自分の置かれた状況に気付いて恥じらうよりも前に、風沙はふわりと体が宙に浮くような感覚を覚える。その後、ズドン、と地響きのような音が耳元で鳴り響いた。音のしたほうを見ると、地表に恐竜の足跡のような、荒々しい竜の手形が残されていた。

「チッ、調停士カ。思いノ外早カッタナ……モウ少しデ、才前等ノ絶望スル顔ガ見ラレタと言ウのニ」

竜は少年を見下ろしながら、ケタケタと笑ってみせた。調停士、と呼ばれた少年は、小さく舌打ちして竜を睨みつける。

「下衆が……調子に乗るなよ」

その時の少年の目は、先ほど風沙に向けたそれとはまるで違う、蔑みの籠った冷たい目であった。見上げていた風沙でさえ、思わず背筋が凍るほどだった。

少年は風沙を瓦礫の山の側へそっと降ろすと、腰を落として優しく告げた。

「済まないが、少しここでじっとしていてくれ」

風沙が頷いたのを確認すると、少年は僅かに目尻を下げた。背中差していた傘を取り出すと、先端を竜へ向けるようにして構える。

「いや……先ズお前ヲ殺シテ、恐怖ニ顔ヲ歪ませタ小娘

ヲ見ルのモ又一興ダナ……ケハハッ！」

竜の爪が再び少年に迫る。前方に動いてそれを躲した少年は、その勢いのまま懐へ飛び込み、腹部を傘で横向きに薙ぎ払う。

「グオッ！」

「いい加減、その耳障りな笑いをやめろ。反吐が出る」

「何……ダト!？」

逆上した竜は蛇のような尾をうねらせ、少年をはたき落とそうとする。しかし少年は傘で尾を弾き返ししながら、周囲の瓦礫を足場に竜の頭部へと迫っていく。

「ク……小癩ナ餓鬼メ! 死ネッ!」

ついに竜の顔と同等の高さまで登り詰めた少年に、竜は至近距離から酸のブレスを吐き出す。人をも融かす酸性雨を何倍にも濃縮したようなそれは、間近で浴びれば生身の人間などひとたまりもないような代物だった。

避けられない、と察した風沙は、思わず顔を手で覆った。だが、

「グゲエッ……!?!？」

次の瞬間耳に入ったのは、間の抜けた竜の鳴き声であった。目を開けて指の隙間から覗くと、そこには開いた傘を構えた少年と、傘から放たれた光弾に脳天を撃ち抜かれ、今にも倒れようとしている竜の姿があった。

「……同じ過ちは繰り返さない。もう誰も、お前等の手で殺させはしない」

少年は竜の体が地面に激突する前に、瓦礫の山を駆け下りて風沙を再び抱え、颯爽とその場を離れた。彼女の隠れていた場所に竜の巨体が横たわると、晴城のドームは消滅し、空には本物の太陽が浮かぶ。日の光に照らされた竜は、恨み節のような呻きを上げながらどろどろと融けていった。

「……巻き込んでしまつて済まなかつたな。怪我はないか」

「あ、は、はい、っ」

少年はフードを取り、風沙に微笑みかける。表情の変化は乏しいものの、そこには確かに彼女へ向けた慈愛が籠っているように感じられた。

「悪いが、今見たことはくれぐれも内密にしてくれ。国家機密らしいからな」

「こっか、きみつ……」

改めて少年の顔を見ると、声や喋り方から受けた印象よりも、彼がかなり幼いことに気付かされた。風沙とも、それほど年の差があるようには見えない。そんな少年から「国家機密」といった言葉が出たのを聞いて、風沙には彼が別世界の住人であるかのように感じられた。

そのとき、彼のレインコートから着信の音が鳴った。少年が可愛らしいでてる坊主型の「AI」デバイスを取り出すと、突如として若い男性の怒号が鳴り響いた。

『アマミさん! ったく、また勝手に動いて! 一人で

行動するなっつていつも言ってますよね!？」

「いや、その……ジングウジ、これは緊急事態で」

『言い訳はいいです! 後でじっくり話を聞かせてもらいますからね』

そう吐き捨て、相手は一方的に通話を切った。少年は溜め息をつきながらデバイスをポケットへ戻し、風沙に背を向けて歩き出した。

「……そういうわけだから、俺はこれで。気を付けて帰れよ」

そのまま立ち去ろうとする少年に、風沙は慌てて呼びかける。

「あ、あの！」

少年は振り返ることなく足を止めた。風沙は一瞬迷ったが、意を決して少年に尋ねた。

「お名前だけでも、聞いておいてもいいですか」

言ってから、まるでドラマのような発言をしてしまったことに頭が熱くなる。だが、彼女は どうしても今聞いておかないと後悔するような気がしてならなかった。

少年は驚いたように動きを止めたが、少しの間があつて、口を動かす。

「……アミカイセイ。快く晴れる、と書いて、快晴だ」

それだけ言い残し、少年は今度こそ足早に立ち去る。風沙はその後ろ姿を見送りながら、小さく呟いた。

「……快晴、さん」

* * *

風沙が天魔の襲撃から救われ、調停士の存在を知った日の出来事。あの時彼が身を挺して風沙を助けたこと、怪物に向けた蔑むような視線、そして『同じ過ちは繰り返さない』という言葉の意味。全てが一本の線となつて繋がりに、腑に落ちたのを感じた。

「……そういう、ことか」

あの日から、風沙は天海のことを一日たりとも忘れたことはなかった。命の恩人だった彼の存在は、いつの間にか彼女の中で神格化され、「巡り会うべくして出逢った運命の相手」のようなものになつていた。調停士になれば彼に再び会える、その一心で一切のツテも無かった調停士への道を志し、歩んできていた。

しかしそれは、単なる思い過ぎにすぎなかった。天海は風沙だから助けたのではなく、風沙のような人がいれば、それが誰であろうと助けに行くのだ。それが彼にとってのけじめであり、贖罪であるからだ。

彼女とて、心の底から彼が「運命の王子様」のような人であると信じ込んでいたわけではなかった。しかしその由来するところが「トラウマ」であると明かされたことに、少なからず落胆していることもまた、事実であつ

た。

「……風沙、さん？」

心配そうに眉尻を下げ、こちらを覗き込む照。人物こそ違えど、それがあの日の天海と重なって見え、風沙は胸を鷲掴みにされたような心地になった。

「……良いよね、あんたは。そうやって寝っ転がってるだけで、カイ先輩から心配してもらえて」

「え……？」

自分が良くない思考に走っていることは自覚していた。だが、彼女の中で渦巻く失望感や嫉妬心が、僅か数分のうちに煮えわたったことによる暴走は、すぐに止められるものでもなかった。

「家族のことがトラウマになってるってことは、今日のも実質、あんたのせいだ。カイ先輩が傷付いたってことじゃない！」

「……それは」

風沙は声を潜めることすら忘れ、立ち上がって照を責め立てる。照は何も言い返せないまま、顔を俯けていた。

「トラウマだかなんだか知らないけど、過去のことだ。カイ先輩を苦しめるのはやめてよ！ あんたのせいで、カイ先輩が死んじゃったら……！」

「それ以上喋るな、日暮」

唸るような低い声に、風沙はびくりと肩を震わせる。視線を落とすと、今まさに話題の中心となっていた天海

その人が、荒々しい呼吸をしながら風沙を諷めようとしていた。

「お兄ちゃん！？」

「カイ先輩！」

二人の少女がほぼ同時に呼びかける。安堵の表情を浮かべた風沙とは対照的に、天海は苦々しい顔で彼女を一瞥した。

「……俺を気に掛けてくれてるのは感謝する。だが、照のことを悪く言うのは止めてくれ」

天海の言葉に、風沙ははっと息を呑む。そのときの天海は、どこか苦しそうな表情をしていた。

「悪いのは、俺だ。照を守ってやれなかった、弱い俺が」

「……お兄ちゃん」

病室に重苦しい空気が漂う。風沙は一時の感情に任せ、照を責めてしまったことを後悔した。人が抱える感情を、誰かのせいだと押し付けることなど、無駄だと分かっていたはずなのに。

「……ごめん、照」

照には見えないかもしれないと思いつつ、風沙はベッドに頭が着きそうなくらいに、深々と頭を下げた。

「八つ当たりだって、分かったのに……酷いこと言っ
て、ごめん」

「……気にしないでください。風沙さんに悪気がないのは、分かっているのです」

照はそう言ったものの、その声に帯びた憂いは完全に隠し切れていたわけではなかった。

「……そういえば」天海がふと思いついたように、風沙のほうを見ながら切り出した。「あの時、『奥の手』を使ったのは、お前だったんだらう」

「奥の手……あつ」

風沙は一瞬何のことか忘れかけていたが、奥の手、というキーワードで思い出した。昼間の作戦時、窮地に陥った戦局を一気に打開した、あの通話——神宮寺から託された、一枚の紙に記されたアドレスのことだろう。

「す、すみません、あのときは何とかしなきゃって、必死で……」

神宮寺からそれを渡されたときに聞いた言葉が、彼女の脳裏に蘇った。天海はこれを使うことを忌避している、と。途端に彼が気を悪くしているのではないかと不安になり、風沙は慌てて謝罪した。

「……いや、あの時はああでもしないと、俺もお前たちも助からなかったらだらう。礼を言うべきなのはこっちだ」それを聞いた風沙はホッと胸を無で下ろした。だがその言葉とは裏腹に、天海の表情は固いままだ。

「恐らくあいつ……神宮寺も、詳しいことは説明しないままだったんだらう。日暮、今あのアドレスへ掛けることはできるか」

「えっ、い、今からですか!？」

聞き間違いではないか、と耳を疑う風沙。今は日付も越えたあたりの真夜中であり、こんな時間に電話なんて迷惑じゃないのか、と当然の困惑を覚えた。

しかし天海は譲る様子もなく、「問題ない」と通話を促す。渋々風沙はアドレスの紙を取り出し、せめて間違い電話を掛けないように、と慎重に入力していく。

そして発信ボタンが押された、わずかコンマ数秒後。ピロリンピロリン、と着信を知らせる Tell-Tel の通知音が、風沙の至近距離から聞こえてきたのである。驚いて腰を抜かしそうになる風沙の奥から、さらに着信に応答する声が聞こえる。

『はい』

通話口とその場の両方から二重に聞こえてきた声に、風沙は口を半開きにして固まる。それは聞き間違えるはずもない、この場にいるもう一人の少女の声であった。

「……嘘でしょ、まさか」

「残念だが嘘じゃない。『奥の手』は、照が持つ能力のことだ」

そう告げた天海の顔は苦々しいものだった。まるでその力が、何か忌むべきものかのよう。

「照には生まれつき、天候を操ることができる能力があるらしい……組織の人間は『天ノ巫女』とやらの素質がある、と言っていたが」

あまのみこ、と、風沙は彼が発した言葉を小さく繰り返す。

「巫女の力を使えば、あの時のように——天魔の生み出した雲域を晴らすことができる。俺たちが『晴域』を作り出すのとは違って、直接雲を取り払い、晴天にすることができるんだ」

調停士は、各員に支給されているオレンジ色の小さなバッジ「晴域バッジ」を用いることで、自身の周囲に戦闘用の結界「晴域」を展開することができる。ただしそれは、あくまで雲のないドーム状の空間を「作り出す」というだけであり、その場の天候に直接作用するわけではない。

また、「晴域」と名はついているものの、バッジで作らず晴域は雨風から調停士の身を守るための、「雲のない」空間にすぎない。対して巫女の力で生み出した晴域は、雲を剥ぎ取って曝け出した太陽の光を直接天魔に浴びせることができる。日光が天魔にとつて致命的なものであることは、風沙もその目で確認済みである。

「すごい……そんな力が」

「ただし、だ」

息を呑んで感心した様子の風沙に、釘を刺すように天海は語気を強めて言った。

「それだけ強い力を使えば、当然使用者である照の身体にも、相応の負荷がかかる。照はただでさえ大天災の後

遺症や、気圧の変化で体調が悪化する気象病も患っているんだ。正直、使わないで済むならなるべく使わせたくないというのが、俺の本音だ」

「……あ」

天海の言葉で、風沙は先の夕刻、医務室に照の姿がなかったことに思い当たる。外出でもしているのかと考えていたが、もしかすると天海と同じように、別の治療室にいたのかもしれない。そう思うとますます申し訳なさが募ったのか、段々と椅子にかけた背中が丸まっていく。

「……神宮寺を含めた組織の上層部は、照の力が天魔との戦いにおける鍵になるんじゃないかと、そう考えているようだが。俺は……照が力を使わなくていいように、これ以上苦しまずに済むように……強くなりたい。いや、強く在らないといけない」

「……カイ先輩」

十年前の第二次世界大天災当時、天海も恐らくは十歳にも満たないくらい——少なくとも、風沙が彼に命を救われた、あの時の彼女より、さらに幼いはずだ。そんな彼に、未曾有の大天災をどうにかできたはずがない。それなのに、彼はその過去を酷く負い目に感じ、今もなお囚われ続けている。

だが、風沙がいくら慰めの言葉をかけたとしても、彼の気が晴れることはないだろうと、彼女は直感的に理解

していた。むしろ彼には、その呪縛が必要なのだ——呪縛は、時として正気を保つ手段になる。彼女自身が、そうであったように。

「……遅くまで付き合わせてしまつて悪かつたな。照も日暮も、今日は疲れているはずだろうに」

「あ、いえ……こちらこそ、煩くしちゃつて……すみませんでした」

風沙はすっかり萎縮してしまい、足早に立ち去ろうとする。そんな彼女を、照が至つていつもと変わらない調子で呼び止めた。

「風沙さん」

えつ、と振り向いた風沙に、照は柔らかに微笑む。

「……私、こんな身体なので皆さんのように、戦場へ行くことはできないんですけど……でも、この力のおかげで、遠くからでも皆さんの戦いに、協力することができて……私は、この力があつて、良かったと思つてます」

そう言った照の顔は、決して建前を言っているようには見えなかった。天海は不本意そうに目を瞑っているものの、驚いた様子ではない。彼にも何度か打ち明けている本音なのだろう。

「だから、もし風沙さんさえ良ければ……私のことも、風沙さんたちと同じ調停士の仲間として、認めてもらえたら嬉しいです」

「……照」

初めて照に会つた時から、風沙は何となく彼女に対抗意識を持つていた。ずっと憧れの存在だった彼に一番近い人物であり、妹というだけで鼻厘されているように感じていた。だがそれは、照を「天海の妹」という視点以外から見ていなかったことに等しいと、今更ながら気付いたのだった。

それは友情の申し出と同時に、もっと対等な立場から競う仲間ライバルで在ろう、という、言わば交戦協定のようなもののように、風沙には感じられた。

「……うん。ありがと」

照に釣られてか、風沙の顔にも自然と笑みがこぼれていた。

* * *

「………なんだ、これは」

丸一日の休養を挟み出勤となつた天海は、調停士部の共用部屋に入るや否や、そう絞り出すように言つた。周りには他の調停士たちも揃つていたが、風沙を除いて皆顔を俯けたり、そっぽを向いたりしている。

「ど、どうですか!? 先輩の傘、あの戦いで壊れちゃ

つてたから……私が修理して、ついでに整備アレンジしておいたんですけど……」

もじもじと背中側で手を組みながら、風沙が恥ずかしそうに呟く。「しょーじき、会心の出来だとは、思ってるんですけど……」

「……いや、ううん……」

珍しく歯切れが悪そうに、言葉を探している様子の天海。「アレンジ」された傘を持ち上げると、周囲の何名かがとうとう堪えきれずに吹き出した。

もともと黒かった傘はメタリック・ピンクに塗装され、

石突いしづきには眩しいほどの光り輝くラメが散りばめられてい

る。骨組みの先端である露先つゆさきには雛あられのようなカラ

フルな飾りが吊り下げられ、布地部分は雲のように丸みを帯びた形に切り取られている。手持ちのハンドル部分には猫のストラップがぶら下がり、全体的にレースやリボンの装飾があらゆる箇所に見受けられた。要するに、

天海という男が持つにはあまりに可愛らしすぎる整備アレンジが施されていたのである。

「……戦闘用の傘にしては、ちよっと装飾過多じゃないか？」

「大丈夫です、各素材は最軽量のものを使ってるので」

「雨を防ぐ布地の部分が少なくなっていたりは……」

「切り取った分は残さず貼って使っているので、総面積は変わってないです。無問題です」

「濡れたら水で重くなるとかは……」

「当然、全部撥水加工はしてあります。安心してください」

必死に逃げ道を探す天海だが、風沙は自信満々に即答を続け、容赦なくそれらを潰していく。

「……風ちゃんって、結構押しが強いよね」

「ラムザにだけは言われたくないと思うよ、風沙ちゃんも」

と、そんな攻防が続く中、調停士部の扉がノックされ、一同は水を打ったように静まり返った。

「失礼します……あ、丁度いた」

扉を開けたのは、A.C.I.D.東京支部副隊長の神宮寺であった。視線の先には、部屋の中央でピンク色の傘を持ち上げている天海の姿があった。

「……どうしたんですか、それ」

「……こつちが聞きたいが」

訝しむような神宮寺の視線に、天海は顔を赤らめながら傘をテーブルの上に戻した。神宮寺は一瞬、見てはいけないものを見てしまったかのような感覚に陥ったが、すぐに一つ咳払いをして用件を切り出す。

「ええと、天海さんと、それから日暮さん。今から少し、お時間いただけますか」

「えっ」

唐突な指名に動きを止める風沙の横で、天海は慌てて弁明を始める。

「違うんだ神宮寺、聞いてくれ、これは——」

「……ええと、それについての追及というわけではないのですが、いや、言いようによっては関係あるとも言えるような……？ まあ、聞いて貰ったほうが早いですね」

「それ」って何、と風沙は天海と神宮寺を交互に睨みつけるが、神宮寺は気にすることなく話を続ける。

「第一会議室で待っているのです、準備ができたら来てくださいね。では」

去っていく神宮寺を目線で見送りながら、風沙は小首を傾げ、天海は右手を額に当てた。その様子を見ながら、背後の観測者たちは小声で囁き合う。

「……え、まさか呼び出し？ 支給品の改造って軍則違反だったっけ？」

「いやいや、学校じゃあるまいし、まさか……な？」

*

「皆さんは『雨宿りの村』という場所について、聞いた

ことはありませんか」

会議室には、既に椅子に腰掛けた神宮寺と、その横には照の姿もあつた。彼女を見つけた途端、天海は目を見開いて驚いていたが、座るように促され彼らも席に着く。

「俺は聞いたことがないな。お前達はどうか」

視線を向けられた風沙はすぐ首を横に振った。その次に目を合わせた照は、少し考える素振りを見せてから答える。

「……昔の話だとは思うんですけど、名前くらいはどこかで聞いたような……」

「さすが照さん、覚えていたんですね。実は天海さんと照さんには、かなり昔に一度、話をしたことがあるのですが」

「記憶力がなくて悪かったな」

ふて腐れたように言う天海に、神宮寺は笑いながら返す。

「まあ、あなたが覚えているとは私も思っていないんですけど。日暮さんにも説明する必要がありますし、丁度良かったです」

そう言うと、神宮寺は会議室のスクリーンを下ろし、Tell-Tel から画像を投影する。画面には日本の地図と、どこか人里離れた雰囲気山村が映し出された。

『雨宿りの村』は、近畿地方の山奥に位置する小さな村です。後で話しますが、とある理由で私達 A.C.I.D.にと

って極めて重要な場所であるため、その正確な場所は上層部の僅かな人間のみにしか明かされていません」

極めて重要な場所。その言葉に、聞いていた三人も思わず息を呑む。

「……そんな大事そうな場所が、どうしたって言うんだ」
よくぞ聞いてくれた、とでも言うように、神宮寺は頷いた。

「単刀直入に言えば、貴方達に——というか、天海さんと照さんに、その村を訪れてほしいんです」

「お兄ちゃんと……私に？」

照も少なからず驚いた様子で、神宮寺のほうを見る。
「おい、本気か？ 照をそんな、遠くへ連れて行くなんて……」

対する天海は、動揺を隠せず非難を込めた眼差しで神宮寺に訴えかける。その姿が子離れできていない親のようだな、と風沙はクスリと笑う。

「その点は安心してください。「雨宿りの村」は——その通称の由来にもなっているのですが——災害による被害を受けたことがない、日本唯一の場所なんです」

「えっ、そんな場所が！？」

「はい。この村には太陽神、天照大御神を奉る神社があつて、その加護のお陰だと言われています」

そう言つて、神宮寺はスクリーンの映像を切り替える。村の写真がズームアップされると、森の木々の隙間から、真つ赤な鳥居が見えているのが確認できた。

「照さんを同行させてほしいと言つたのは、そのことが関係しています。照さんの持つ能力……『天ノ巫女』についての伝承が、あの村に遺されているんです」

「……伝承、か」

巫女、という神秘的な響きから、何か由緒のある能力ではあるのだろう、と天海は薄々勘付いていた。神話などの教養的な知識はほとんど持っていないため、それが何を意味するかなどは全く検討もついでいないのだが。

「加えて、この村には遙か昔から傘を作り続ける、由緒正しき傘の職人がいます。天海さんの傘を新調するといふ目的でも、悪い提案ではないと思うのですが」

「先輩の傘……？ ああ、それなら私が——」

「——あ、ああ、非常にその、素晴らしい提案だな、神宮寺。ぜひ行かせていただきたく存じる」

急にやや不自然な日本語で同調し出す天海。照と神宮寺は思わず吹き出しそうになるも、ここが攻め時と思つたのか、神宮寺は大きく頷いて話を続ける。

「ありがとうございます、天海さんならそう言ってくれらると思いました。早速ですが、明日から出発しましょう。申請は通してあるので」

「明日、ですか……急ですね」

とんとん拍子に話が進んでいくので、耐えかねた風沙はついにおずおずと手を上げる。

「あ、あの……私、なんでここに呼ばれたんでしょうか」

「ああ、そうでした。日暮さんには、二人の護衛およびお目付け役として、遠征に同行してほしいんです」

「日暮を……俺たちの護衛に、か？」

若干納得いかなそうな顔で天海が尋ねる。

「確かに、お目付け役はともかく、護衛のほうは私より適任がいるんじゃない……」

「実力者という意味では、確かにそうなのですが」二人の言葉を一切否定することなく、神宮寺は答える。

「東京支部としても人員不足なので、あまり戦力を削りたくないんですよ。村には天魔も発生しないですし、むしろここより安全ともいえますしね」

「……あー、なるほど……」

つまり風沙を戦力として期待した、というよりは、反対に失っても痛くない戦力という意味での抜擢なのだと気付いてしまい、風沙は完全に脱力してしまう。経歴的に仕方ないとはいえ、肩透かしを食らったような気分だった。

「まあ、日暮さんを推薦したのは、実は私なんですけど」

「……え」

神宮寺の言葉に、啞然として口を開く風沙。

「一昨日の戦いを見て、日暮さんはいざという時の判断を迷わない強さがあると感じたんです。状況判断の能力は、時として単純な戦力よりも重要になりますからね」
神宮寺の視線がどことなく天海に向けられているように風沙には見えたが、当の本人は気付いていないのか、何食わぬ顔で続く。

「ともかく、明日から出発だな。よろしく頼む」

天海に「よろしく」と言われるのが、頼られているように風沙は無性に嬉しくなる。

「はっ……はい！」

恍惚とした顔で返事する風沙を見て、彼らの「お目付け役」に彼女を推薦したことに、ほんの僅かに不安を感じる神宮寺であった。

《続く》